

---

# 解決不可能事件～超能力～

me

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

解決不可能事件～超能力～

### 【NZコード】

N4171X

### 【作者名】

me

### 【あらすじ】

憧れの警察官になれた新人警官、榎原右京（勉強出来るだけ）の身の回りで起こる不可解な事件。

共に捜査するのは同期の女刑事、前原飛鳥（運動出来るだけ。後容姿が中学生）

大都会で、噛み合わせの悪い二人が必死に（グダクダ）捜査！死闘（？）を繰り返す！

## プロローグ（前書き）

一応SF物です。

しおりを挟みやすい様に各話は割と短めにしました。  
最初あたりは余り話が進みませんが気長に読んでいただけると幸い  
です。

## プロローグ

青年が1人、暗い裏道を歩いている。弱そうな学生を裏道に連れ込み金を巻き上げた帰り道だ。

身勝手な優越感に浸りながら歩いていると背後から誰かが近づく物音が聞こえて来た。…………。さつきのヤツが追いかけて来たのか、などと深く考えずに振り返った瞬間。

青年の体が炎に飲み込まれた。

警察署に配属されて一日目。自己紹介も口クに済んでいないにもかかわらず、先輩刑事に無理矢理事件現場に連れて行かれた。しかもそこは殺人現場ときた。

が、死体らしき物は見当たらない。あるいは炭の塊の様なものだけ。そう。焼死体と言つヤツである。

「なんか…………殺人現場つて感じませんね」

素直な感想を述べる。

「だな。死体が辛うじて人の面影を残してる程度だ。無理もない」

「事故…………の可能性は?」

「ま、それも一応視野に入れて調査するわ。

取り敢えずあとは鑑識に任せておこう。お前もうちの部署の連中とまだ顔合わせてないし、1回戻るとするか

．．．．．そういうやうだったたつけ。

## プロローグ（後書き）

この時点ではS.Fとか超能力要素ゼロです。

## 第一章 合流

まずは署に戻り挨拶を済ませる」と。

「今日からお世話になります、榎原右京です。どうぞよろしくお願  
いします」

挨拶のあと色々な人が声を掛けてくれる。明るい雰囲気だ。これな  
らやつていけそうな気がする。年齢や出身校を聞かれたり「冗談混じ  
りに、へー京都みたいな名前だね。とか言われたりもした。

一区切りついたあと、自分を事件現場に強制的に連れて行った先輩  
刑事、河野さんに声をかけられた。

「んじやあまあ、その窓際のデスク使つてよ」

【窓際族】と言つ単語が一瞬頭をよぎるが、まあ、気にしそぎだろ  
う。サラリーマンじやあるまいし。

指示されたデスクに意識を向けて初めて、その席の隣に人が座つて  
いるのに気付いた。

そこには中学年？・・・いや、高校生かな？という位の女の子が  
座つてケータイを弄つている。

誰かの娘さんか？それとも補導されたのか？

無視して座るわけにもいかないので取り敢えず声をかけて見る事に。  
「あの・・・君、どうしてここにいるの？」

「そんな事、聞かなくてもわかるだろ？。頭おかしいんじやないか  
？」

・・・・・・・・・・

若干イリつこたものの相手は子供。平静を装い再び優しく声をかける。

「いやあ流石に聞かないとわからないよ」

「疑問が確信に変わった。お前は頭がおかしい。」

流石にこの言い草には我慢ならない。舐められて居るのもしかねないし、少し強く出る事にした。

「そんな事分かるわけないだろ！ 良いかから答えなさい」

すると今度は氣急そうに携帯から田を離し向こうから声をかけて来た。

「逆に聞く。私をなんだと思つてるんだ」

「補導されたか誰かの娘か。ま、そんな所かな」

軽く返事しただけの筈がどうやら地雷を踏んだらしい。

「娘！ 補導！ お前一体私が何に見えるー！」

急に口調が強くなつたため少し面食らつてしまつた

「ん、あつと、えつと、中学せ」

！

気付いたら床に転がされていた。どうやら何かしらの技をかけられたらしい。と言うか結構痛い。それと中学生？の女の子がギヤーギヤー騒いで耳も痛い。にも拘わらず周りの刑事達は笑つて見ているだけである。どう言つ事だらうか？

「ふざけるなこのカス人間！」

「カスつて . . . . . ボキヤブラリー少ないな」

「黙れカス！」「ミー塵！ クズ！ えつと . . . . . カス！」

「またそれかよ……………つて言つつか離せ！あと何で怒つて  
んだよ！」

「信じろよー今から私が言つ事を！絶対に！でないと殺すぞー！」

怒りで顔が真っ赤になつてゐる。

「分かつた！分かつたから！」

その女の子が恥ずかしそうに、小さな声で呟く。

「私は……………正真正銘……………21歳だ」

「ふつ

つい笑つてしまつた。そしてそれが命取りになつた。

破壊音の様な物が鳴り響く。

「痛つ . . . ! 痛い痛い痛い痛い！」

「そのまま死ね！」

関節技をかけられる。と言うか本氣でもがいているのに逃げられな  
いつてどんだけ力強いんだよ。

「！」河野さん助けで！

たまらず助けを求める神原。

「あつははははははは、いやあ前原は結構気難しいヤツなのに、  
もう仲良くなつたのか！」

「うわああああああああ見捨てられた！」

と、ここで今神原が感じている痛みが全て吹つ飛び。

原因は河野が発した言葉。

「いやあ良いねえははは。これなら一人でコンビ組ませても大丈夫  
そうだな」

！

勿論自分よりも早く前原？とか言つ小さい女が抗議する。

「河野！こんな不謹慎な奴と組むなんぞ御免だぞ！」

「不謹慎の使い方間違つてるしつて痛い！痛い！」

「ほら！こんな細かく揚げ足取る様な人間だぞ！きっと性格もカス  
みたいなヤツに決まってる！」

「細かく揚げ足…………間違つては…………ないか」  
ギヤーギヤーと一応初対面の一人が喧嘩していると

「ははは。まあまあ、初対面でこんなに仲良く話せるなんてきつと  
相性良いんだよ。前原と榎原。合わせてハラハラ（原原）コンビ。  
なんちやつて～あつはははははは

「河野」

「ん、どうした前原」

「死ね」

「なつ、お前先輩に向かつて死ねとはなんだ！」  
今度は榎原が割つて入る。

「そつだよ失礼だぞ。礼儀がなつてない」

「だろ～やつぱり分かつてるねえ」

河野が嬉しそうに声を上げる

「死ねは言い過ぎだぞ。そこはつまらないか寒い、位にしどかない  
と」

「あははははははははは」

前原が榎原の前で初めて笑つた。

「てつ、お前らなあ～。…………よし一分かつた～やつ  
ぱりお前ら一人で捜査いけ！」

「無理だ！」

「無理ですつて」

2人して声をあげる。

「まあ良いじゃねえか。ドラマとかでもよくあるだろ。男女ペアが  
さ、最初は仲悪くても最終回までには恋愛感情まで芽生えてる。な  
んて事がさ。」

「恋愛感情！無理無理無理！こんな細かい成金男！」

「成金じやねえよ…」

「じゃ、早速聞き込み宜しく～」

「ちょっ、待てよ！河野！」

「つーか先輩を呼び捨てとか…………良いのかよ」

「つるさい！死ね！」

「死ねしかいえないのかよ。中学生か」

「五月蠅い！カス！消えろ！帰れ！かえれえ！」

「お前…………やっぱ語彙が少ないな。後なんでそんなに気持ち悪い喋り方なんだ？」

「気持ち悪い…………私の喋り方のどじが気持ち悪いのだ！いたつて普通ではないか！」

「～のだ！とか、～ではないか！とか、～か」

「～何だその嘲る様な顔は！」

「嘲る…………まさかお前がそんな難しい言葉を知ってるなんて  
つて痛い痛い痛い！」

「さあさあ、取り敢えず例の焼死事件の捜査宜しく～

」つして2人は河野に叩き出された。

[検索へ（後書き）](#)

ひとつ動かしてしまった

## 捜査開始

結局無理矢理捜査に駆り出された2人。榎原は取り敢えず話しかけることにした。

「で、どうする?」

「どうするって……この2人じゃ現場まで行ってみるか聞き込みするかぐらいしかないだろう」

「どうして」

「どうしてって……ドラマとかじやその一つが鉄板だろ。まだ身元が割れてないし、遺族に会いに行くって言う選択はないしな」

前原が続ける。

「ところで場所、分かるのか?私はしらんぞ」

「わかんねえのに提案したのかよ。まあ俺は一度無理矢理連れて行かれたから場所は覚えてるし、あの時は細かく見てなかつたから、もう一度いつてみるか」

-----

現場はまだ鑑識が調査を続けていた。相変わらず薄暗く不潔な場所だ。警察手帳を見せ、中に入れてもうつ。と、そこで声をかけられた。

声をかけてきたのは、恐らく20代後半位であろう鑑識の男だ。茶髪だからか、キャラキャラした印象を受ける。

「2人とも顔合わせたことないけど、もしか

して配属されたばかり?」

「ええ、初めまして。榎原右京です」

「前原飛鳥。21歳です」

卷之二

「ゴメンゴメツテ

!

「えーっと…………刑事さんか」「ここに来たつてことは、やつぱ捜査だよね」

「あ、はい。何か分かつことはありますか」前原の手を振り払いながら榎原が尋ねる。

「ああ。ちょうど身元がわかつた所だよ。被害者は木寺障寺、19歳で身内はいない。職にはついておらず生活保護だけで生活していたみたいだ」

「へえ、寺みたいな名前だな」

前原が余計なことを言うが黙殺する。

「今の段階ではそれ位かな。まだ使われた道具も特定できていないし」

「これ以上の情報は得られないか？」  
そう判断して現場を離れた。次は聞き込みだ。



## 前原の精神年齢が低過ぎて困る

やはり現場のすぐ近くを聞き込む「」と。

まずは、隣の「コンビニ」に入った。

「すみません。ちょっとよろしいでしょうか」

例の「」とく神原が、恐らくバイトの学生であろう青年に声を掛ける。

「あ・・・。どうされましたか？」

警察手帳を見せた為かあからさまに警戒されたのが分かる。

「実は今日「」の近くで若い男性の死体が見つかったのですが、その事は「」存知ですか？」

「ええ、そりや、隣あんなに騒ぎになれば知らないってことはないでしょ？。普通」

まあ、確かにそれもそうか。もつ少し核心に触れる質問しないとな。

「では、こ・・・」

「あの・・・」

バイト風の店員が言葉を遮る。

「その、刑事さんの隣にいる女の子は・・・？」

！

「貴様！い「」の子は・・・。こんな見た目でも一応私と同い年なんですよ、あははは、ああつと、勿論同じ警察官ですよ」前原が民間人にキレる寸前でなんとか神原が割って入る。すると今度は怒りの矛先が神原に向いてしまった。

「おい神原！こんな見た目とまじつぱつ意味だ！答えるこの力ス人間！」

「ちょ待て待て待て！コンビニの中で叫ぶな！待てって痛いから！ひねるなひねるな！痛い痛い痛い痛い！」

勿論コンビニにてお密さんがこいつに注目している。

「おい！前原！みんな見てるから！良いから後にしろって！」

「つるさい関係ない！一応同じ年だと？何が一応だよ！正真正銘同じ年だらづが！しょづ！しん！しょづ！めい！」

「『メン』『メン』『メン』『メン』『メン』痛い痛い痛い痛い！こんな事で本気でキレるとか……小学生かよ。

「あの～」

店員さんが声を掛けてくれたお陰でなんとか前原から逃れる事に成功した神原。と言づか元はこの店員が余計な事を言つからこんな事になつたのだ。

「今は休憩時間ですけど…………もう30分無い位ですよ？それに……話したい事もありますし……」

不思議と今は距離を置かれている様な印象は受けない。前原とのさつきの喧嘩（一方的）のお陰で緊張がほぐれたのだろうか？最初より言葉も柔らかく感じる。だとしたら今日初めて前原に感謝するけど……。それよりも話したい事があると言つるのが気になる。

「すみません、では、お聞かせいただけますか？その  
たい事を」

「で、結局何を見たのだ？」

前原が尋ねる

一 狙人

「おお、あか！」

「本当か！」

同時に声を上げる。

「詳しく話してもうえますか?」

昨日、午後11時半頃なんですが、その時のバイトが終わってち  
ょうど帰ろうとしていた所だつたんです。

覗いてみたんです。

・ そしたら炎が上がりつて、その中心に、炎の中心にですよ！  
・ 男が立つてて。しかもその人の ・・・・・・えつと  
・

「どうしたのだ？ 続けて貰つて構わないぞ」

我慢出来ずに声を上げる前原。

えつと . . . 見間違ひだと思つんですけど . . . . .  
その炎は . . . . 男の体から発生している様に見えたんです . .

## 2人だけでの話し合い

聞き込みを終えた2人は署に戻る事にした。  
今はその帰り道である。

真横をマフラーを外したバイクが轟音を響かせながら通りて行く。  
お互言葉を交わす事なく歩いている。と、そこで沈黙を破ったのは  
神原の方だった。

「なあ、前原。さっきの話どう思つ?..」

「信じると言わても難しいな。あの話を真に受けるなら、犯人は  
超能力者と言う事になるぞ」

あの話、と言つのは先ほどの証言である。

「彼は犯人の体から炎がでていた、と言つていた。しかし常識的に  
考えればあり得ない」

つまり、と付け加えて前原が続ける。

「あの証言はあまり当てにしない方が良いかもしけんな」

「そつか～あの人人が嘘ついてる様には見えなかつたけど?..」

「ならば本気で言つっていたのだろう。だが本気で言つた事が全て真  
実とは限らない。恐らく漫画か何かの影響でも受けたのだろう」

「ふうん。漫画みたいな喋り方のくせによく言つよ」

例の如く殴られた神原。

「いつてえ . . . . . でもさ、ほら、発火能力とかあるじゃん。  
パイロキネシスだつけ?..」

「だつけ?とか聞かれても私は分からんぞ。そんな馬鹿馬鹿しいも

のある訳ない。虚構だ虚構。まあ体から炎が出ていたと言つ事は火炎放射器の様なものを使ったのではないかと推測される」

「火炎放射器ねえ、そんなもの持つてたら殺した後逃げられないんじゃないか？」

「知らんよそんな事。小さいのもあるんじゃないのか？手のひらサイズとか」

「こいつまた無責任な事を。堪らず榎原が突っ込む。

「イヤイヤ手のひらサイズの火炎放射器なんてチャッカマン位しか無いだろ」

「まあ炎の話はもう良いだろ。あの証言は忘れよう。それより犯人の特徴も言つていただろ。何だっけ？」

「チャッカマンスルーカよ。と言つた捜査協力してくれた人の証言の一部を無かつた事にして良いのか？と一瞬思つたがやはり自分もあの話は信じられない。前原の言つ通りそつちの証言を気にした方が良いかもしねない。

「えつと、あの話によると犯人は恐らく男で、身長は高い方、顔は見えなかつたらしい」

「成る程。河野に報告出来るのはこの位か。それともそのパイロキ何とかも報告するか？」

最後に付け足した言葉は殆どふざけて言つてみただけ。しかし榎原は少し迷つて答えた。

「一応……報告しておこう」

心の何処かでまだこの事件の事を軽く見ていたのかも知れない

署に戻り河野に全てを話した榎原。

勿論超能力の件は河野に笑い飛ばされて終わりだった。

「だから言つただろう。あんな事誰も信じるわけないだろ?」前原が勝ち誇つた様な顔をしているのがムカつく。

「でもさ、これじゃあ犯人特定できないぞ。正直口クな収穫無かつたよなあ」

「全くだ。右京、何かできないのか?」

前原が唐突にわけの分からぬ事を言い出した。

「何かつて……何だよ

当たり前の疑問をぶつける。

「ほら、例えばその辺にあるもので計算式書いたら犯人わかつちゃつたとか、キーワード紙に書いて千切つて放り投げたら犯人わかつちやつたとか

「そんな物語みたいに事が進む訳ないだろ、むーり」

「つまらん解答だ、暇潰しにもならん」

「暇なら少しでも事件解決出来る様に努力しろ」つまらないツッコミをする榎原。

グダグダと雑談する2人。しかしこんなくだらない話が出来るのも余裕があるからだ。

次の日の朝、被害者が7人にまで達する事など、今の2人には知る由も無い。

## 前原飛鳥の日常パート

前原飛鳥が住んでいるのは警察署から少し離れた賃貸のマンションである。

家に到着し、鍵を差し込み扉を開けようとするが鍵はかかっていないかった。

「お～、こもつ帰つてきてるのか～お兄ちや～ん？」

前原の声に反応して部屋から声が帰つてくる

「んー」

声の主は飛鳥の兄の前原鏡花きょうかだ。髪は黒色です。<sup>レ</sup>長め。顔も悪くない。因みに年は24歳。

靴を脱ぎ、部屋にはじるや否やソファにどっかりと腰掛ける前原。鏡花はソファの前のテーブルで自分でいたであらつお茶を飲んでいふ。

「よこしょつと、…………そつこえぱびつしたんだ、お兄ちゃん？今田がドートとか言つてなかつたか？その割には帰りが早いぞ。何もやつてこなかつたのかあ？」

半分笑いながら問いかける前原。しかし鏡花からは意外な答えが帰つてきた。

「うん、まあ、フタれちゃつた…………から」

一瞬驚いたものの前原は再び一ヤ一ヤしながら質問する。

「へえ～～～。何かやらかしたのか？」

「実は . . . さ、黙でおくのも嫌だつたから、僕に前科があるつて説明したんだけど、そしたらそんな人とは付き合えないみたいな事言われちゃつて」

「何だ、そんな事でフラれたのか。そんな事ならお兄ちゃんは気にする必要は無いぞ。昔何があつたかだけで人を判断する様なヤツ、お兄ちゃんにはもつたない位だ。きっと性格も相当悪いぞ。別れておいて正解だ、せーかい」

軽い口調だか、前原が兄の鏡花を思つ氣持ちは痛いほど伝わつてくる。

「ありがとう、飛鳥。何か飛鳥には迷惑かけっぱなしだよ」寂しそうに鏡花が呟く。

「何を言つているのだ、あらたまつて」

「お兄ちゃんのせいで、辛い思いとかもしただらうし、警察官にならうのだつて」

「あれは私が謝りたい位だ！私が警察官になりたいなどと言へばだらん夢を捨てられないせいで、お兄ちゃんとの法的な家族関係まで断ち切つてしまつた！」

しかし前原が何と言おうが鏡花はまだ自分を責めている。

「正直お兄ちゃんといで、飛鳥には何も良い事が無かつたと思つんだ。いつその事、この家からも出て行つた方が良」

「そればダメだ！」

そう叫んで前原は鏡花に抱きついた。

「私は . . . . . 私はお兄ちゃんと一緒にいたいんだ . . . . .  
. . . 私のためにも . . . . . 私のそばに居てくれ . . . . .  
. . . お兄ちゃんは . . . . . 私にとつてたつた一人の家  
族なんだ . . . . . 一人じゃ寂しいよお . . . . . 「 泣  
きそうな声で兄に縋る前原。

突然の事で、驚きからか何も声がかけられない鏡花。しかし鏡花の  
目からも自然と涙がこぼれていた。

次の日署に到着した榎原右京を待っていたのは重苦しい沈黙だった。あの前原でさえも黙つて静かに座つている。不思議に思い声をかけようとする。と、ある異変に気付いた。ホワイトボードに貼られた事件関係者の写真が昨日よりも明らかに増えている。そしてその写真の横に書かれた文字を見て気付いてしまった。それらが全て新しい被害者のものであると。驚きのあまり黙つて突つ立つていると不意に前原が声をかけて来た。

「新しい被害者は6人。これで合計7人だ。今回被害に遭つた6人と最初の1人の殺され方は全く同じ。ただ、唯一違うのは最初の1人は身分がわかるものがなに一つ無かつたのに対して、今回はわざと免許証や生徒手帳などを残している事だ。処分した方が捕まりづらいにも拘わらず犯人はそうしなかつた。 . . . . . ふつ . . . . . つまり遊ばれている訳だな。お陰で親族を呼ぶ事もできた訳だ。何度も何度も親の泣き声やらを聞いてこつちは気が滅入りそうだ」

前原が纏つている空気がいつもと全然違うのが分かる。話し掛けるのさえも気まずい。が、幸いな事に何も言わずとも前原が話し続けてくれた。

「話を聞く限り被害者は全て、働いてもいないヤツや学校にも顔を出していらない様な口クでもないのばっかりだった。おそらく犯人もわざとそう言つ奴らを狙つたのだ」

声も暗いし、いつもの元気など微塵も感じられない。と、不意に前原に呼び掛けられた。

「右京」

「ん、何だ？」

前原と話しているだけなのに、何故か緊張してしまつ。

「お前に一つ提案がある。正直こんな空氣の時言う事がどうかともわからん。いつもならバカにされて終わる様な事だが、一つ、犯人を捕まえる方法を思い付いた。真剣に聞いて欲しいのだ」

今の前原がこの状況でボケる事は無いだろう。となればどんな内容だろうとも、前原が真剣に考えた事だ。バカになどするはずがない。いや、出来るはずも無い。

動を出す

「化け物」  
「こなれ?」

怪訝そうな声で聞き返す榎原。語尾も上がつてゐる。そう。前原飛鳥が言う犯人を捕まえる方法とはこの事だ。

「わ、私はこれでも真剣に考えたのだぞー。ほり、ドラマとかでも良  
くあるだろー！ 図検査とか！」

あからさまに榎原の真面目な雰囲気が消え失せた為か、かなり慌てている様だ。

だから物語と現実を一緒にするなってそんなの無理だよ

「！ やってみなければ分からぬだろ！ せめて話だけでも聞いてくれ

本人はいたつて真面目に考えた事らしく顔を真っ赤にして食いついてくる。取り敢えず話しぐらいは聞いてやる事に。

「で、どんな作戦なんだ？」

こちらが興味を示した為か前原は張り切つて説明し始めた。

「えっと、被害者に共通している事は全員がチャラチャラした不良達だと言つ事だ。つまり、

待てよ。嫌な予感がする。巡回検査 + 全員が不良 + 前原の頭 = で導き出される作戦なんて . . . . .

「右京にやつて欲しい事は一つー不良っぽい格好で犯人を呼び寄せ  
て欲しい！」

想像通り過ぎて思わず笑ってしまった。

そして笑つたら案の定前原に殴られた。

結局前原の提案に従う事となつた神原は現在、裏道で極悪と書いてあるわけの分からぬジャージを着て吸つた事もないタバコを吸つている。

「はあ～。こんなに成功するわけないよな～」

ため息混じりに本音がこぼれる。ちなみに前原はと言つと少し遠くに車を停め、その中からこちらを見守つて（監視して）いる。良い加減路上に座つてゐるだけと言つのにも飽きてきたので前原に電話をかける事に。すぐに前原は電話に出た。

「もしもし～前原～。こんなのがつちやけ無理じゃないか？」

「右京が諦めてどうする。あと貴様が電話してると犯人はおそらく接触してこない。と言つ事で切るぞ」

宣言通り神原が何か言う前に通話は切られた。神原が恨みがましく車の方を見ると前原が手であつちへ行け、と言う動作をしてゐ。こっちを向いたら犯人が接触してこなくなるだが、と言つ前原の心の声が聞こえてくる様でなんだか余計に悔しい。と、ここで想定外の事が起きた。一人のいかにも優しそうな見た目の青年が声をかけてきたのだ。ただし神原ではなく、車の中の前原に。

「あの、すいませ～ん」  
クルマの窓をコンコンと叩きながら好青年（仮）が呼び掛けている。前原も仕方なく応じてゐる様だ。

「なんだ、今忙しいのだが」  
不機嫌を隠さずに応じる前原。ちなみに榎原は心配そうにその様子を眺めている。

「前原飛鳥さんと言つのは貴方で間違いありませんか？」

驚いた事に向こうは名前を知つてゐる様だ。

しかしこの男、申し訳ないが全く覚えがない。

「うむ。私が前原だか・・・・申し訳ないが私は貴方に心当たりが・・・・」

するといきなり好青年（仮）が気持悪い笑いを浮かべた。

「知らなくても良いんですよ。私ね、頼み事をされてるんですよ

「・・・・・・・・結局私に何の用があるのだ」

その問いかけにも無視して話し続ける青年（不気味）

「その仕事はさ、これ」

そうつぶやいた瞬間青年の右手が爆ぜた。つぎの瞬間には前原が乗つていたクルマが爆発、炎上した。

前原の乗る車が炎上した。そう気づいた時には既に神原の脚は動いていた。

急いで車に駆け寄ろうとする。が、しかし目の前に青年が立ちはだかった。

「お前も仕事の対象なんだよ！」

そう叫んで青年は手を振りかざす。そして驚く事にそこから真っ赤な炎が出現した。

「！」

避けると言つよりは殆ど真横に転ぶと言つ感じて辛うじて回避する。無理な姿勢から無理矢理によけた為、案の定体制を崩してしまった。青年は今がチャンスとばかりに再び炎を振りかざそうとする。今の神原は尻餅をついているため彼の運動能力ではおそらく次の攻撃は避けられない。が、攻撃を受けるより先に爆発にも似た音が鼓膜に響いた。そして青年はうめき声を上げて神原から離れてゆく。この音は学校で何度も聞いた事がある。間違いない。銃声だ。

「何を遊んでいるのだこの馬鹿」

不意に声が届いた。

この少女の様な声、この喋り方。間違いない。

「前原！」

「何を驚いているのだ。私はあの程度で死ぬ程柔な人間ではないぞ」言葉こそ軽いものの、前原の頭からは血が流れ右の頬まで垂れる。間一髪といった所だ。あと少し逃げるのが遅れれば確実に死んでいた。

「右京。これが件のパイロキなんとかってヤツか」

「パイロキネシス。インターネットで検索すりや、必ずといって良い程ヒットするメジャーな超能力だが、本当にいるなんて信じられない……」

ここまで見せられてもまだ何かトリックを使っているのでは、と思つてしまつ。それ程に今一人に起こつてゐる現象は不可思議なものだ。

「…………グダグダ話してんじゃねえ……」

叫び声と共に再び炎が一人に迫る。

「――！」

綺麗に真横に回避、着地してなおかつ既に銃口を青年に向ける前原。避けようとした所足がもつれ四つん這いになりながら必死に炎から離れようとする神原。

「チツ、使えん男だ！」

咳きながら前原は青年になんの迷いもなく発砲する。万全の状態なら両足を撃つて犯人を動けなくする事など前原の射撃のスキルを持つてすれば難しい事ではない。が、しかし今の前原は頭を打つた時のダメージがまだ残つてあり、神原を助けた最初の一発はなんとか命中したものの、今回に至つては一発も当たらない。と、突然犯人が逆上して叫ぶ。

「つたつくよお～なんで俺の邪魔ばっかするんだよー！」

「犯罪者の邪魔をするのが警察の仕事なのだ。悪く思うな」と前原。

「そもそもなんの罪もない一般人を何人も殺しておいて、何が邪魔するなんだ」

神原も割り込む。

すると突然青年がクスクスと笑いだした。

「何がおかしい！」

榎原が大声を張り上げる

「いやあ、アンタさ、今罪のない一般人とか言つたな。まずその前提が間違つてるんだわ。俺が殺したのは全員どうしようもないクズ！社会の「ゴミ！……！」……いわば俺は「ゴミ掃除のボランティアをしてるつてことなんだよ。それに別にあいつらが死んで困るようなヤツなんて誰もいないだろ？」

この言葉で被害者の家族の事をふと思い出した。彼らは全員同じ表情をしていた。皆泣いていた。悲しんでいた。そしてそれを思い出した瞬間言いようも無い怒りが込み上げてきた

！

「ああ？何黙っちゃつてんの？もしかして俺の言葉に心を打たれちゃつた？ハハハ」

「こいつは何も分かつてないー

「死んで困るようなヤツがいないだと！ふざけるな！どんな人間にもその人を思う家族がいる！仲間や友人がいる！そんな事もわからず、殺人を正当化してこんな事をやつている貴様はただの自己満足クソ野郎だ！だからお前も死ね！いやいつそお前だけ死ね！」

気付けば、思つていた事を全て吐き出していた。そして勿論犯人を刺激してしまつた。

「ふざけんなこの偽善者があああああー！」

青年が腕を思い切り振るうと路地の半分を埋め尽くす巨大な火柱が上がつた。

そしてそれは真っ直ぐ前原に向かう。

驚きのあまり足が動かない。避けられない、と前原は悟つた。それでも体は動かない。

しかし前原の体が突然真横に弾かれた。榎原が前原を真横に突き飛ばしたのだ。

『右京、ダメだ . . . . . そんな事したら . . . . . 』

と、思った時には既に榎原の体は炎に飲み込まれていた。

炎に飲まれた瞬間、前原の顔が見えた。  
今にも泣き出しそうな子供の様な顔をしていた。

「俺…………死ぬのか…………」

他人事の様な考えが頭に浮かぶ。

すでに炎で目の前が真っ赤だというのに、ほとんど熱さを感じない。  
ヒーターの前に座り過ぎた時の様に、僅かにヒリヒリ痛むだけだ。  
と、体に衝撃を受けた。しかしこれは地面にぶつかった、早い話が  
転けただけだ。

耳元に前原の声が届く。しかしその声も次第に聞こえなく…………

ならなかつた。

冷静によく見ると自分の体に炎は燃え移っていない。

「右京。 一体何が…………」

前原が話しかけて来たが、こっちが聞きたい位だ。何故、自分は無  
傷で立つているんだ？

混乱する頭をなんとか働かせようと/or>する。  
と、いきなり大声が榎原の耳に飛び込んで来た。

「ふ、ふざけんじやねえエエエ」

犯人の手から再び炎があがり、榎原を襲う。

突然の出来事だった。よけられるはずも無い。しかしよける必要も無かった。犯人の放った炎は榎原の体に触れた瞬間音もなく消えていった。

「なんだよ…………何なんだよ！」

パニックに陥った犯人は無差別に炎の塊を放つ。しかしそれらは榎原の身体に触れた瞬間全て消滅していく。

特別何かをしたわけでは無い。ただ突つ立っているだけで全ての攻撃を無効化できるのだ。

驚きのあまり放心する榎原。

すると突然前原が叫んだ。

「何が起こっているか全く分からんが、とにかくチャンスだ！ここで一気に片付ける！走れ右京！」

そうだ、犯人の攻撃が通用しない今が確かにチャンスだ。

「うおオオオオオオオオオオオオ！」

叫びながら走る榎原。もちろん犯人の元へ。

犯人は守りに入るつもりか、目の前に炎の壁を作る。

しかし榎原はそこに何も無いかの様に通過する。  
犯人はもう目の前だ。やる事は一つしかない。

榎原は警棒を引き抜き犯人の顔面を思い切りぶん殴った。

漫画や小説みたいに派手に何も吹っ飛ぶ、と言う事はなかった。  
その代わり犯人はその場にパタリ、と言う様な小さな音を立て倒れ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4171x/>

---

解決不可能事件～超能力～

2011年11月20日16時42分発行